

第1節 新たなネットワークづくりの潮流のなかで

気負わず無理せずボランティア

わかくさの会

心のゆたかさが、最高の財産

栄区の湘南桂台団地にある障害者通所施設『朋(とも)』は、昭和61年の春にできた。まだ、そんなに時間がたつたわけではないが、地域に自然になじんでいるという。その理由の一つに、地域のボランティアが多くいることがあげられる。『朋』にかかわるボランティアグループのなかで、一番古くから活動しているわかくさの会を訪ねてみた。

会員は30人。ほとんどが30代から50代の、地域の主婦である。わかくさの会に入る前には、ボランティア活動に携わった経験のない人がほとんどだ。

「始まりは、新聞の記事からです。『朋』が建設される前のことですが、地域に反対の声もある、と書いてありました。近所で、賛成の人もいるんじゃないかと話し、説明会にも足を運んでいるうちに、勉強をしよう、『朋』を支えていこう、と人が集まって、それがわかくさの会になりました」

と語る、代表の甲斐貞子さん。

現在の活動は、掃除、洗濯、施設内での介助

送迎と4つのグループに分かれて、会員がそれぞれ仕事を分担する。世話をする相手は、手足の自由がきかず寝たきりという最重度の障害者だから、決して楽な仕事ではないように見える。しかし、甲斐さんは言う。

「無理はしていないんです。週に1回でも、月に1回でもいい。それぞれが都合のよい時間をもちよって、という考えです。午前中に『朋』へ手伝いに行つて、お昼には家に帰ってきて家事をしたら、各自が負担にならないかたちを取っているんですよ。家を少しも空けられないという人でも、買い物ついでに『朋』に寄つて、家でできる仕事をもらつてくれることもできますしね」

地域に施設のあることの意味が、だんだん見えてくる。

「友だちなどから、『大変ね』『偉いわね』と言われることもあります。でも、私たちはつらいのを我慢しながらやっているんじゃないんです。そうは言っても、気骨の折れることにはちが



『朋』の運動会でも、ボランティアが大活躍

いはないのでは? 「こんなことがありました。『朋』を見学に、お年寄りの団体がみえたことがあります。その中にいた車椅子の方を見て、『おじいちゃん、歩けないの? かわいそうね』と言う子がいるん

